

中国帰国生徒の自己認識に関する一考察：生徒のライフヒストリーから

福畹, 智

九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻：博士課程1年

<https://doi.org/10.15017/7360086>

出版情報：国際教育文化研究. 1, pp.51-60, 2001-03-30. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



中国帰国生徒の自己認識に関する一考察

－生徒のライフヒストリーから－

福嶋 智

1.はじめに

現在の日本社会においては、多文化的状況が進行しているといえるであろう。そのような社会の状況を反映して、学校においても多文化的状況が進んでいる。それにともない、いわゆる「日本文化」を身につけた「日本人」⁽¹⁾生徒や教師、ひいては学校全体と、異なる文化、すなわち「異文化」を身につけた生徒との間のコンフリクトが起こっている。このことは国民国家における国民教育が、「nation」を創出するためのシステムであることを想起すれば自明のことである。行政の側の概念においても、児童生徒がもつ背景(=文化)ではなく、国籍によって児童生徒を分類している。すなわち、国籍と文化が一致することを想定しているのである。

このような枠組みからは、「日本人」とは異なる背景をもった日本国籍をもつ児童生徒は欠落してしまう。現在、日本で出生、もしくは低年齢で来日し、日本の学校教育を受ける異なる文化をもつ子どもの数は増加している。また、国籍取得要件の緩和も検討されている現在の状況においては、日本国籍をもった異なる文化をもつ児童生徒の増加も想定される。そのような状況をふまえて、本研究においては、定住傾向が強いとされる中国帰国者に着目する。

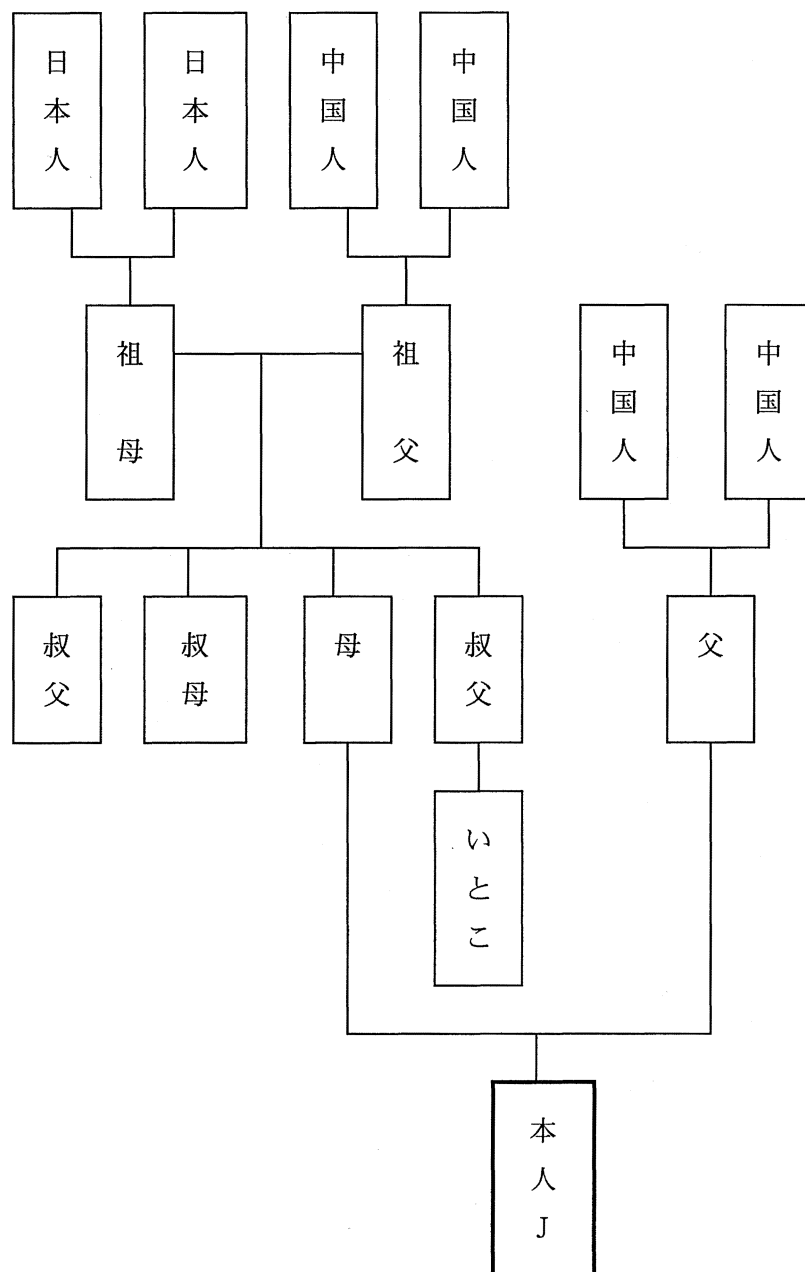
本研究においては、中国帰国者3世が周囲からの影響を受けながらどのように自己認識をしているのかを、ライフヒストリーから読み解いていくことを目的とする。また、そのことにより、いわゆる「外国人児童生徒」という言説における姿ではなく、現実の姿の一端を明らかにできると考える。

2.調査対象と方法

本研究のライフヒストリーの聞き取り調査は、2000年5月より週一回、2000年2月まで、Jの自宅の自室で行った。また、J本人の記憶を確認するため、Jの両親から資料の提供を受けた。

以下にJの親族関係を示す(表1)。表1はJの親族関係のなかで、聞き取り調査において、本人が関わりがあると認識している部分だけを抜粋したものである。

表1 Jの親族関係*1



3.Jのライフヒストリー

Jのライフヒストリーにおいて、どのように自己認識がなされてきたのかをみていく。表2はJの略年表である。

表 2 略年表

1983 年	0 歳	中華人民共和国遼寧省瀋陽 (Sheng Yang) 市 ⁽²⁾ で生まれる
1985 年	2 歳	渡日
1986 年	3 歳	K 市 W 区に転居 ⁽³⁾ H 保育所に入所
1987 年	4 歳	F 市 N 区に転居 ⁽⁴⁾ M 保育園
1989 年	6 歳	F 市立 H 小学校入学
1993 年	10 歳	国籍取得 (9 月)
1994 年	10 歳	現在の自宅に転居 (1 月) ⁽⁵⁾ F 市立 I 小学校に転校
1995 年	12 歳	F 市立 I 中学校入学
1998 年	15 歳	F 市立 S 高校入学
2001 年	18 歳	同校退学

J は中華人民共和国遼寧省瀋陽市で生まれている。その時点で祖母はすでに日本に在住していた。その後、J が 2 歳の時に渡日をする。渡日後、祖母が在住していた K 市 W 区に住むこととなる。その後同区内の保育所に入所する。

保育園では日本語を話してました。家では両親がぼくと話すときは片言 (ママ) の日本語でしたね。両親同士は中国語です。今も一緒ですね。そこではですね、もちろん友達 は日本人ですし、子どもだったからかもしれないですけど、すぐ慣れましたね。

中国に居住したのが2歳までだったため、友人は近所の限られた子どもたちであったと考えられる。そのため、友人という存在を認識したのは日本に来てからであると思われる。母親によると、日本語を習得するのは非常にはやかったという。しかしながら、中国語はほとんど話すことができない。J本人によると、聞いて理解することはできるが話すことはできないという。

その後、F市N区への転居により、M保育園に転所することとなる。そして、F市立H小学校へと入学する。H小学校区は中国帰国者が多数居住しており⁽⁶⁾、小学校には日本語教室が設置されている。

小学校にはいるときに名前が「S」から今の「H」に変わったんですよ。なんか変な感じでしたね。でも保育園の時は下の名前をそのまま呼ばれてたからそんなに・・・なんていうんですかね・・・(名前が)変わったっていう感じはしなかったですね。いとも小学校はいるときに名前変えたみたいです。たぶん国籍もそうなんじゃないかな。ぼくの場合、下の名前自体が日本人っぽくない名前だから、どうなんでしょう(笑)

Jによれば、小学校に入学する際日本国籍を取得し、それにともない苗字が変わったということであるが、実際には国籍取得は小学校5年生時の引っ越し時である。このことは、国籍取得よりも苗字が変わることのインパクトの大きさを示唆している。Jにとっては、国籍よりも、ほかの子どもたちが実際に自分を認識する際の「名前」が重要なのである。

H小学校においては、Jの在籍期間中に数度の差別発言があったという。その際のことをJは次のように話している。

小学校に入ってからすぐ・・・じゃなくて・・・1年生か2年生のころに差別発言があったんですよ。(筆者：どういうふうな?) まあ、「中国に帰れ」とか「中国人のくせに」とかですね。そのときは「なんでそんなこというんだろう」って思いましたね。そのときに先生が、言った子にものすごく怒ってたんで、「ああ悪いことなんな」って感じたくらいでしたね。

小学校低学年という年齢段階のためと思われるが、発言内容に対してほかの「悪口」とどこが違うのか、という疑問を抱いていたという。また、J自身、自分が中国で生まれたという実感が伴わなかったという。そのため、そのような差別発言があった際に、中国で生まれたということを、実感したという。このような、周囲のJを見る視点と、J自身の認識のずれは次のような発言のなかにもうかがえる。

そういう差別とかがあったからかもしれないんですけど、小学校入ってから拳法の教室に行かされたんですよ。親はいじめがあるかもしれないからってことだったらしいんですけど。そのときに師範の先生から「中国で生まれたのを大切に」っていわれたんですけど、中国での記憶がほとんどないから、どうなのかなって思いました。

当時のH小学校における日本語教室は週に1回の学活が中心であった。その当時の日本語教室について、Jは次のように話している。

(日本語教室は)あってないようなもんだったですね。週に1回教室に行くだけだったですから。あんまり好きじゃなかったです。友達と遊ぶ時間が減るから。日本語教室の時間に、そのころ新聞クラブに入ってたんですけど、いろいろやってたんです。そしたらそのとき、先生が来てものすごく怒られたんですよ。そういうのがいやだったですね。(中国帰国児童ということを)みんな知ってましたからね。(日本語教室に行くのは)別に気にならなかったですよ。

Jによれば、日本語教室に行くことにより、中国帰国児童であることがわかるため嫌悪するというのではなく、友人との時間を制限されることに抵抗感を感じていたという。

その後、Jの家庭はH小学校区に隣接するI小学校区に土地を購入し家を建て、転居することとなる。土地の購入とともに日本国籍を取得した。転居にともないI小学校に転校する。I小学校には日本語教室は設置されていなかった。そのため、中国からの児童が来た場合、帰国児童と同じクラスにしていたという。

I小学校に転校してからはそういう差別とかはなかったですね。小学校5年生の時に中国から来た子がいたんですけど、ぼくは中国語話せないですし、困りましたね。一緒のクラスだったんですよ。でも言葉がわからないから困りました。

Jは中国語を話せないことに「こだわり」をもっているように思われる。Jは、中国に親しみをもちつつも、「中国に旅行とかで行っても言葉ができないから」というように、言語が壁になっているという表現を用いながら、中国と自分のずれを表していると思われる。

また、二つの小学校を通じて、ほかの帰国児童に対して次のように述べている。

どっちのときもそうなんですけど、ほかの人たち(帰国児童生徒)が隠してたのが嫌だったですね。べつに隠さなくてもいいのになって思っていました。

このことについて、次のようにも述べている。

僕自身が日本国籍を取ってるからそう思うのかもしれませんがね。もし中国国籍だったらそうは思えないかもしれません。でもそのとき(H小学校在籍中)に中国国籍だったっていうのは知りませんでした。

ここからは、Jはほかの人々からの認識の指標となるものとして名前を重視しつつも、国籍も、自分を規定するものとして見ていると考えられる。すなわち、他者が自分を規定する指標としての「名前」と、自分が自分を規定する指標としての「国籍」である。

その後、I中学校に入学する。I中学校はH小学校とI小学校を校区としている。I中学校入学直後、3年生に対する差別発言があったという。

いろいろ考えるようになったのは中学校に入ってからですね。入学してすぐ、差別発言があったんですよ。ぼくにじゃないんですけどね。先輩に向かってです。で、その先輩が生徒会の役員やってたんで、先生たちに話して全校集会開いたんですよ。そのときは、中学校でもあるんだなって思いましたね。やっぱりっていう感じでした。(筆者：どんな内容だったの?)小学校の時と一緒にした(笑)。なんか進歩がないなって思いましたけどね(笑)。

そのときの日本語教室の学活の様子を次のように話している。

F先生(日本語教室担当教師)が、「「中国人のくせに」とか言われてるのは、(直接言われた生徒だけではなく)みんなが言われてるんだぞ」って言ったのを覚えてますね。そこがほかの悪口とかとは違うのかなって思いました。でもなんとなく違和感がありましたね。僕自身、中国人といえば中国人だし、でも日本人だといえば日本人ですしね。でも日本人、中国人どちらで呼ばれてもなんか違和感があるんですよ。母は日本人の血を引いてるのはたしかだし、でも父は全然中国人ですしね。なんだかどっちなのかなっていうのを考えてました。うーん、微妙なんですけど、やっぱりなんとなく日本

の方が上、って感じなんですかね、中国に対する(日本人の)イメージって、(中国を)下だっけ見てるのかなってのは感じます。でも僕自身、それがなかったっていうとあるかもしれないですし。

自分が中国人なのか日本人なのか、自己認識の混乱が起こっていることがわかる。このような混乱は、自己を認識するための指標を見失ってしまったために起こったといえる。また、このような混乱が、差別発言があったときに起こったということから、自己認識における他者の存在の重要性は明らかである。そのため、シチュエーションによって自己呈示を使い分けることでそのような混乱を回避していると考えられる。言い換えれば、状況によってアイデンティティを使い分けているといえるであろう。

また、Jは中学2年生の時に渡日してきたCについて次のように述べている。

中学校の時にC(以前筆者が聞き取り調査を行ったことのある生徒)がうちの学校に来たんですよ。そのときに、すごく日本を拒否してたんですよ。「中国に帰りたい」とか。でも本音かどうかはわからないですけどね。でも仕方ないかもしれないですね。

筆者が昨年行った聞き取り調査において、Cは日本に親しみをもちながらも、日本に対して拒否感を抱いていた。そこからは、葛藤を回避するための他者からの分離という傾向が見受けられた。

そして、I中学校を卒業しS高校に入学する。S高校は、I中学校が属する学区において中位校である。

高校に入ってから先のことを考えるようになりましたね。でも考えたんですけど、結局将来なんになるとかまったく浮かばなかったんですよ。給料稼いでくればいいのかなって。それで、入ってからずっと大学に行こうかと思ってなかったですね。どちらかというと、勉強したくなかったから行きたくなかったです。だからなんのため高校に行くのかわからなかったです。で、高校にも行きたくなかったです。

このように考えるようになったきっかけとして、次のように話している。

小学校の先生になりたいってずっと思ってたんです。でも、そのころに叔父が「中国出身だから先生になれないだろうし、なっても偉くなれない」って話してたんですよ。そ

れを聞いてそうかもしれないなって思いました。それがきっかけといえばきっかけですね。

ここからは、叔父の日本社会に対する見方、それを受け入れたJという二つの点が読みとれる。Jは、そのような叔父の日本社会に対する見方を、それまでの差別体験、周囲の発言などを元に判断し、受け入れたと思われる。すなわち「日本人」になりきれていない自分を感じているのである。しかしながらその一方で、「中国人」にもなりきれない自分をも感じているのである。

そして、2年生になるころから、高校へ登校しないようになり留年し、2001年1月S高校を退学する。

4.まとめ

現在のJは大学を目指し大学入試資格検定に向けて学習している。Jは現在の自分について次のように述べている。

今は、自分が中国人でも日本人でもいいんじゃないかなって思います。こだわらないようになりましたね。高校を辞めてからすっきりしたっていうか、なんか、うーん・・・今までと・・・訣別っていうと、違うんですよね・・・ふっきれたっていうんですかね、そんな感じです。うーん・・・答えがでないじゃないですか。答えをだすっていうのも意味がないかなって感じてます。最近は自分がやりたいこともありますし。だから大学にも行きたいですね。

この何気ないように見える「こだわらない」という発言は、これまでJの辿ってきた人生から生まれてきたものである。「こだわらない」という言葉だけを取り出した場合、「投げやり」になっているか、まったく何も考えていないと捉えられる可能性がある。しかしながら、このような何気ないように見える言葉の裏には、他者との関わりのなかで、葛藤を抱えながら折り合いをつけてきた過程があるのである。その葛藤とは、自分自身の側からの自己認識と、他者からの自己認識の間のずれに起因する。この自己認識の間の差異は、自分自身の自己認識の指標と他者からの自己認識の指標の差異によるものである。そのような差異による葛藤に折り合いをつけるために、シチュエーションによって表出するアイデンティティを選択しているとみ

ることができると思われる。そこでは、アイデンティティが分裂しているのではない。数多くあるアイデンティティのなかから選び取っているのである。

このような自己認識の差異による葛藤から折り合いに至る過程は、児童生徒の多様性に注目しなければ見落とされてしまう。このような異なる文化をもつ児童生徒の多様性への着目は、同時に、「日本文化」をもつ「日本人」児童生徒の多様性への着目へとつながる契機となりうるのではないかと考える。

註

(1) ここでいう「日本人」生徒とは、日本で生まれ、育った(幻想としての)「日本文化」を身につけた生徒を指す。従って、「外国の文化」を身につけていると見なされる「海外・帰国子女」は含まれない。

(2) 瀋陽は東北三省(遼寧、吉林、黒龍江)において最大の都市であり、政治・経済交通の中心的位置にある。瀋陽はまた中国でも有数の工業都市でもあり、市を南北に貫く鉄道西側の”鉄西地区”と呼ばれる広大な工業地帯には大中型国有企業が集中している。

(3)(4) K市、F市とも九州の中規模の都市である。

(5) 転居先は、F市の新興住宅地である。

(6) H小学校区には、大規模な公営団地があり、中国帰国者の世帯が多く居住している。

A Study of Self-Cognition of Japanese-Chinese Student : His Life-Hisotory

Tomo FUKUSHIMA (Graduate School, Kyushu Univ.)

The purpose of this article is to consider self-cognition of foreign children. Now, in Japan, the situation of society has become multi-culturally. As situation become multi-culturally, conflicts has occured in Japanese school. In the typical nation-state, the purpose of its national-education is to make "nations". Therefore, in Japanese education system, students who has "different" cultures occure conflicts.

In spite of this situation, administration classifies these students "Foreign Students." Indeed, these of them acquire Japanese nationality. This point in time, they consist "Japanese Students". But, they are not "Japanese Students (typical Japanese)."

Focusing on a life-history of one of such students, Japanese-Chinese student, this paper tries to show his process of self-cognition and an "actual" shape of him.

His chronological table is below (Fig.1).

Fig.1 Chlonologica Table (extract)

year	age	event
1983	0	born in Cheng-Yang City, China
1985	2	come over to Japan
1993	10	acquire Japanese nationality
1993	10	moving to present house

He said, "I wodered why he said discriminal words, for example "go back China" (in elementary school)

, "Why teachers said me that I had to make importance of being born in China?"
(in elementary school and junior high)

, "Japanese or Chinese?" (in highschool)

From his words, he was confused between nationality and ethnicity, or, self-cognition and self-cognition from others.

And now, he said,

"I understand maself Japanese "and" Chinese, not Japanese "or" Chinese"

, "Moreover, not Japanese and Chinese, it is important to feel "It's I!"

These discrepancy between self-cognition and self-cognition form others brought him conflicts, and finally he reached a self-compromise. It is important to focus this conflict-compromise prosess. As focusing on such process, we will can find an opprtunity of typically "Japanese students"s plurality.